

ESSAY
KOBAYASHI
Satomi
No.01

旅 の こ と ば



小林聡美

こばやし・さとみ

女優。東京都生まれ。主な出演作に、映画「かもめ食堂」(06)、「めがね」(07)、「プール」(09)、「紙の月」(11)、テレビドラマ「やっぱり猫が好き」(81~91)、「すいか」(03)、舞台「あの大鴉、さえも」(16)など。『キウィおこぼれ留学記』、『アロハ魂』(ともに幻冬舎)など、エッセイ集の出版も多数。

おもいで列車の旅

初めての海外旅行は高校卒業を控えた春休みのこと。友達とふたりで、その頃流行っていたバックパッカー的なヨーロッパ周遊旅行を計画した。英語の勉強は中学、高校の授業のみだった私と、アメリカで夏休みのホームステイを経験済みの友人の英語も私よりややマシなレベル。どうにも頼りないふたりだった。

当時は今よりも海外の情報は大雑把。言葉はもちろんのこと、まさにカルチャーショックの連続だった。美術館の絵画や、歴史的建造物に感動しつつも、街には怪しい目つきの人がうろつき、宿の風呂は途中で水になり階段の踊り場の電灯はタイマーが数秒で切れ真っ暗になった。日本の日常とうってかわって、緊張の連続だった。

それでも列車の旅は楽しかった。ミュンヘンからザルツブルクへ向かう列車で、ドイツ人の陽気なおじさん三人と同席になった。珍しいアジアの小娘にどこから来たのか、どこへ行くのかいろいろ英語で話しかけ、持っていたお菓子をたくさんくれた。私たちも一生懸命英語で話した。ビートルズが好きでリバプールにも行って、これからサウンド・オブ・ミュージックのロケ地も見ると、とかなんとか。おじさんたちは、私たちの不自由な英語でも、よく聞き、よく笑い、よく感心してくれた。入国や予約などの緊張を伴う英語とは違って、理解し合おうとする友好的な会話は言葉半分、気持ち半分で十分伝わるのだと、温かな気持ちになった。私たちはお礼に、かっぱえびせんと使い捨ての紙カイロをあげた。「振ると温かくなりますよ」とジェスチャー付きで説明すると、「お——っ」とおじさんたちはどよめいた。

あの列車の小さな空間で、言葉に頼らないコミュニケーションの温かさを体験したけれど、でもこれで言葉があれば最強だと思った。もっと話せるようになりたいと思った。英語の勉強をさぼりがちな昨今、それは原点にもどる思い出だ。